

【佳作】

ピンクのカーディガン

西村 美香・大阪府貝塚市

三十年たつた今でも、あの時のピンクのカーディガンのことなら細部まではつきりと思い出すことができる。上等なフワフワの毛糸で編まれた、羽のように軽いカーディガンは、手にとっただけでも、掌の上に温かい空気がほんわか積もるようだつた。ゆつたりとしたラグラン袖はリラックスした雰囲気で、そしてなによりも素敵だつたのは、前身ごろに並んだ銀色のボタンだ。控えめに光る外国のコインのようなボタンは、桜の花のように薄いピンク色の毛糸の上で、うつとりするほど上品に見えた。

こんなに気に入ったカーディガンは、後にも先にもなかつたのに、それが私の物になることは、ついぞなかつた。試しに肩から羽織つてみるとことさえ、私はしなかつたのだ。でも確かに今でも、あのカーディガンは間違いなく、私にとつては一番のお気に入りだ。

私がそのカーディガンと出会つたのは、大学一年生の秋だつた。同級生の男の子に、授業が終わつたあと、もしよかつたら一緒にデパートに行つてくれないかと頼まれたのだ。その日はちょうどアルバイトも無かつたので、私は気軽に受けた。

デパートに着くと、男の子は婦人服売り場に向かつた。お祖母ちゃんへのプレゼントを買いたいから、一緒に選んで欲しいのだという。お祖母ちゃんはその頃、夫であるお父ちゃんを亡くしたばかりで、すっかり気を落としてしまつていたから、孫である男の子はプレゼントをあげて元気づけたかったのだ。

もうすぐ寒くなるから、暖かいセーターでも買つてあげたいというので、二人であれこれ見ていると、ベテランっぽい女性の店員さんが声をかけてくれた。そして、私たちがもうすぐ八十歳になるお祖母ちゃんのためのセーターを探していふるとわかると、親切にアドバイスをしてくれた。

「それならセーターよりも、少しゆつたりした形の、前あきのカーディガンの方が、脱ぎ着がしやすくて喜ばれると思いますよ」

確かにその通りだと、店員さんがお勧めしてくれた、いくつかのカーディガンを、私たちはためつすがめつ眺めた。

「ねえ、あれはどう？　あのマネキンが着ているピンクのカーディガン」

店員さんは、私が目にとめたカーディガンを取ると、目の前にふんわりと広げてくれた。「これは最高級の毛糸で編まれているので、驚くほど軽くて、それによくても暖かいんです。どうぞ手にとつてみてください」

手で触れたとたん、私はそのカーディガンの虜になり、男の子に言つた。

「こんな綺麗なピンク色なら、きっと気持ちも明るくなるし、絶対にお祖母ちゃんも、この可愛いボタンを気に入ってくれるよ」

最高級というだけあって、それは、今まで店員さんが並べて見せてくれたどの品物よりも、高い値段がついていた。かなりの大金だ。それは男の子がほとんど毎日行っているアルバイト代の、ほぼ三ヶ月分だった。

少し考えたあと、男の子は真剣な顔をして、ピンクのカーディガンを手にとると、「これをください」と言つた。

私は、自分が買つてもらつたわけでもないのに、まるで天に昇りそうなぐらい嬉しくなつて、店員さんと顔を見合わせて笑つた。

綺麗に包装されてリボンをかけられたカーディガンと引き換えに、男の子の財布は可哀そうなくらいに、ペしやんこになつた。

その後、帰省した男の子がカーディガンを渡すと、お祖母ちゃんは涙を流して大喜びで、それからはずつと、まさに肌身離さずだったそうだ。だけど、よほど気持ちが弱つていたのか、それからすぐ、まるでお祖父ちゃんのあとを追うように亡くなつてしまつた。

お葬式から戻つてくると、男の子は真っ赤に泣きはらした目で、お祖母ちゃんが最後までカーディガンを大切にしてくれていたこと、お棺の中にも入れてほしいと言い残したこと教えてくれた。

男の子は今、私の夫だ。

一緒にカーディガンを買いに行つた日から、三十年間ずっと、山あり谷ありの人生を二人で過ごしてきた。長い間には色々あつたけれど、本当にピンチの時、ギリギリのところで助かってきたのは、夫のお祖母ちゃんが守つてくれているからだと、私は固く信じている。

ふと何かの拍子に、あの素敵なかーのカーディガンが、目の端をかすめるような気がすることがある。もちろんただの思い過ごしなのだけれど、それでも私は、まるで肩に何かを羽織らせてもらったかのように温かい気持ちに包まれる。

もしかすると、私は自分でも知らないところで、あのお気に入りのピンクのカーディガンを、天国にいる夫のお祖母ちゃんから、そつと着せてもらつているのかもしれない。